

2023 年度 FD 活動の取組み

1. FD・SD 研修会

教学マネジメントについて ― 何が起っていて、どうしたらよいのやら

講師:藤村正之氏(上智大学総合人間科学部社会学科教授)

司会:大野早苗(副学長)

主催:武蔵大学 FD 委員会

対象:専任教職員

開催日時:2023年6月15日(木)15時20分~16時50分

開催形式 対面開催(8号館8階50周年記念ホール)

【FD・SD 研修会の概要】

2024年度のFD・SD研修会は上智大学総合人間科学部社会学科教授の藤村正之氏を講師としてお招きし、「教学マネジメントについて」というタイトルでご講演をいただいた。藤村氏は、上智大学で副学長として大学執行部のご経験をお持ちであるとともに、公益財団法人大学基準協会の大学評価委員会委員を務められた経験をお持ちで、教学マネジメントにも精通されている。また、上智大学に移籍される以前は本学社会学部教授でいらしたことから、本学の事情をご理解いただいている方でもあり、本学の外部評価では評価委員長もご担当頂いている。

研修会は対面方式で実施したが、やむを得ない事情により研修会を欠席した教職員向けに研修会の様子を録画し、後日にオンデマンド方式で研修会を視聴して頂いた。

講演では、認証評価の経緯や概要、教学マネジメントに係る諸課題についてご説明いただいた。詳細は以下のとおりである。

テーマの副題にもあるように、教学マネジメントに関する理解は教職員間でもばらついており、学部長や大学執行部も矢継ぎ早に出される指示への対応に四苦八苦している。教学マネジメントの実質化には程遠い状況にも見受けられる。大学基準協会で実施された教学マネジメントに関するアンケートの回答結果をみても、「認証評価は教育改善に役立っている」、「教育改善の補助金により現場の教育改善が進んだ」との感触は得られておらず、大半の大学教員が教育評価のための業務を負担と感じている。また、「国の教育政策内容を大学執行部が一般教員に伝えている」と回答した教員は少数派であり、教学マネジメントの全体像を周知する機会、学内における対話や学生への伝達の機会が不足している状況が窺える。

1991年の大学設置基準の大綱化以降、文部科学省などにおいて、様々な高等教育政策が実施されてきた。大学認証評価制度は2004年に始まり、現在の第3期大学認証評価制度では、内部質保証の全学マネジメントの有効性、学習成果の可視化への取り組みが求められている。これは、中央教育審議会大学分科会から2020年に出された「教学マネジメント指針」でも示されており、「卒業認定・学位授与の方針」(DP)、「教育課程編成・実施の方針」(CP)、「入学者受入れの方針」(AP)の3つの方針を通じた学修目標の具体化等が定められるとともに、学修成果・教育成果の把握・可視化(明確化したDPの把握)や、教学マネジメントを支える基盤としてのFD・SDの高度化や教学IR体制の確立、また社会に対する説明責任をはたすものとしての情報公開の向上が掲げられている。

教学マネジメント指針では学修者本位の教育への転換が求められている。3つの方針は教学マネジメント確立にあたっての最重要項目であり、学修者本位の教育の質向上を図るための出発点とみなされている。ただし、DPは事後に設定されたものでもあり、既存のカリキュラム体制のもとで、教員が授業運営を行うとともに学生が授業に参加しているのが現状である。2025年から始まる第4期大学認証評価制度では、学部・学科をオーナーとした3つの方針・学習成果把握の実質的な運用をめざすとともに、教学マネジメントへの学生参画が予定されている。前者に関しては、大学執行部の側面支援が期待されている。後者に関しては、学生自身にとってDPを理解可能・意義実感できるようにするための工夫が求められると言える。

改めて教学マネジメントについて考えてみると、学生の学びの充実化が最重要課題であることは言うまでもなく、目的達成のために教学マネジメント整備に時間・資源が割かれるのは本末転倒である。ただし、教学マネジメントの課題の全体地図を理解することは重要であり、そのためにも、大学執行部、学部、学科の各層間の情報・コミュニケーションを充実させる必要がある。また、学部DPと科目の関係を学生にも

周知する工夫も必要になる。今後は新学習指導要領の下で学んだ高校生が入学してくることになり、アクティブ・ラーニング等の取り組みに高校間でばらつきがあることも考慮すると、学習に対する意欲や学習歴の学生間の格差があるなかで、いかに意欲のある学生のモチベーションを維持するか、対応が求められることになる。

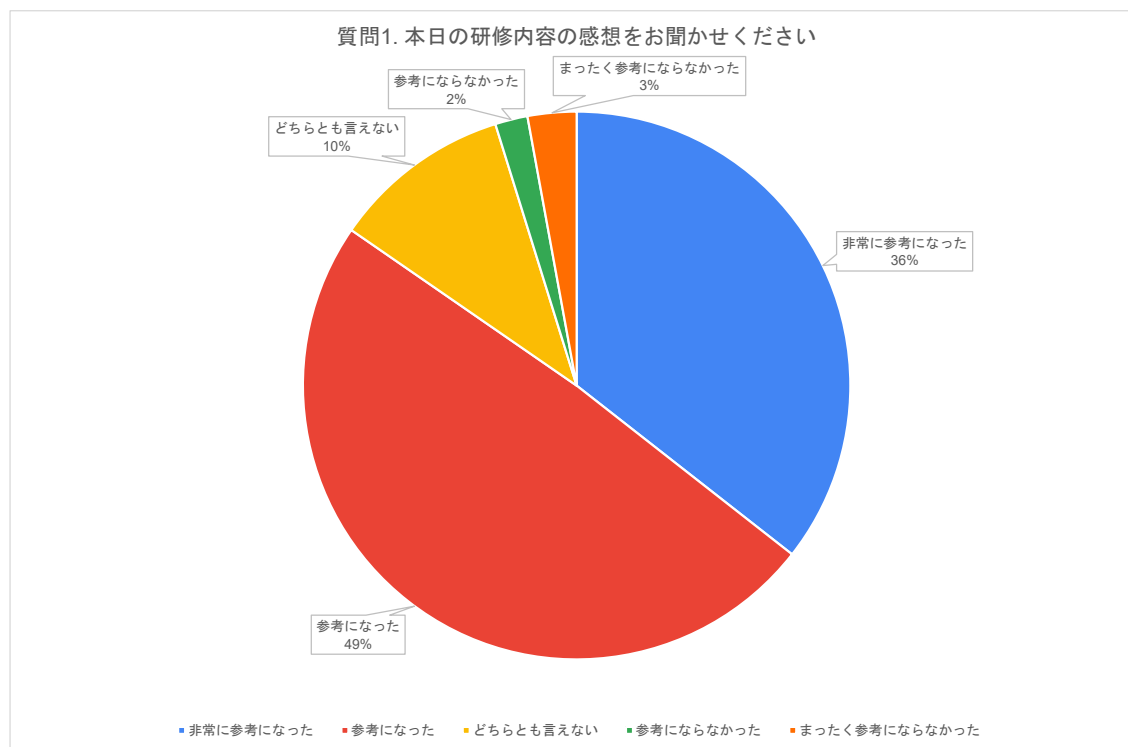
【FD・SD 研修会受講者アンケート回収結果】

FD・SD 研修会の内容に関して、概ね好意的な感想が得られたが、教学マネジメントの理解度の違いにより、研修会の内容に対する好感度にばらつきが生じた可能性がある。内部質保証委員会の構成員や自己点検・評価委員などを経験した教員、あるいは教育プログラムの定期的検証の作成に携わった教務委員長、研究科教務主任経験者など、もしくは大学評価に関する学外委員経験者などは、教学マネジメントに関する話題に触れる機会も比較的多いと考えられる。しかし、五月雨式に教学マネジメント関連の対応を要請されることもあり、これらの経験者であっても、教学マネジメントを包括的、体系的に理解している教員は多くはないと推察される。藤村氏は、一般の大学教員の立場はもちろんのこと、大学執行部役職のほか、大学基準協会大学評価委員会委員をはじめとする各種の大学評価委員を務められたご経験をお持ちであり、多角的な視点から教学マネジメントのあり方、方向性、課題に関してご講演頂き、示唆に富むお話を伺うことができた。一方、教学マネジメント関連の話題に触れる機会が乏しい教員には研修会の内容は難解と受け止められた傾向がみられる。今後の教学マネジメント指針では学修者の到達度が問われることから、授業担当者は学修者によるDPの達成度の把握を求められることになるが、自身の授業運営とは関係のない研修内容と理解した教員もなかには存在した。教学マネジメントに関する教員間の共通理解を深める必要性を感じた。

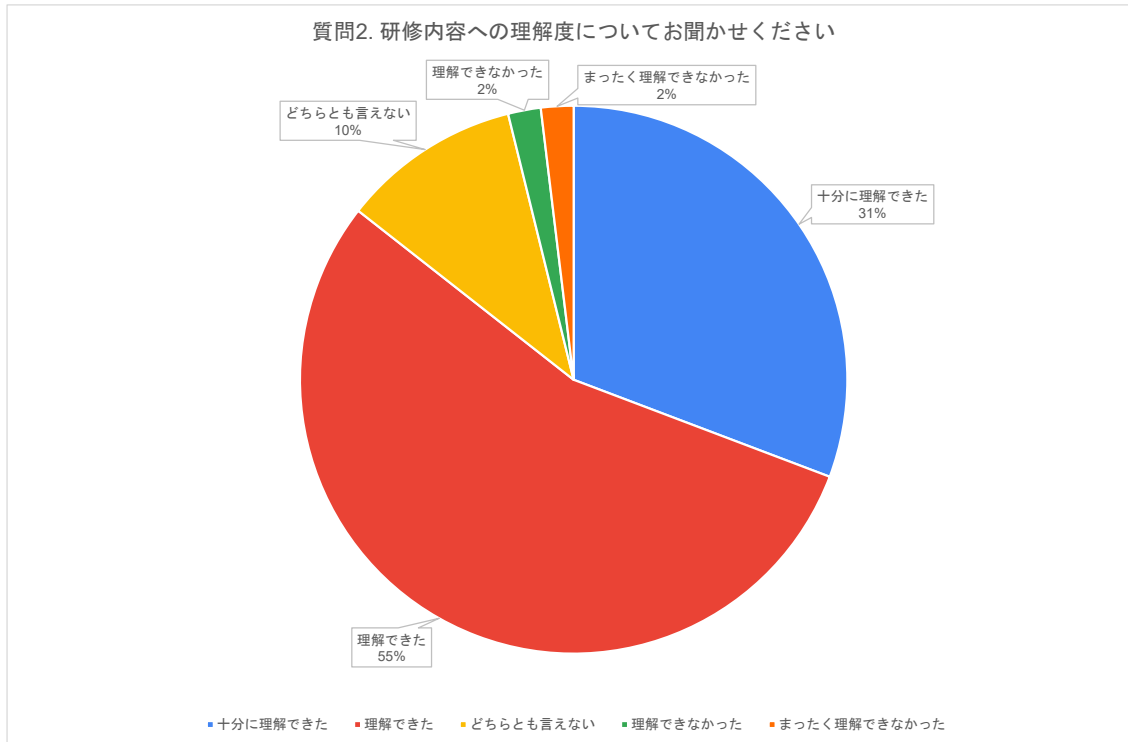
また、研修会の実施形式に関するご意見もいくつか頂いた。本年度は50周年記念ホールにて対面方式で実施したが、音響機器の問題により、話者の音声の不鮮明になるという指摘を頂いた。また、研修会の日程を6月の木曜4限に設定したが、入試作問等の業務と予定が重なり、開催日時の再考を希望する声も比較的多かった。また、日本語を母語としない教員にとっては言語の壁もあり、研修会の内容を理解できなかったとの意見が多く寄せられた。

[アンケート回収結果の詳細]

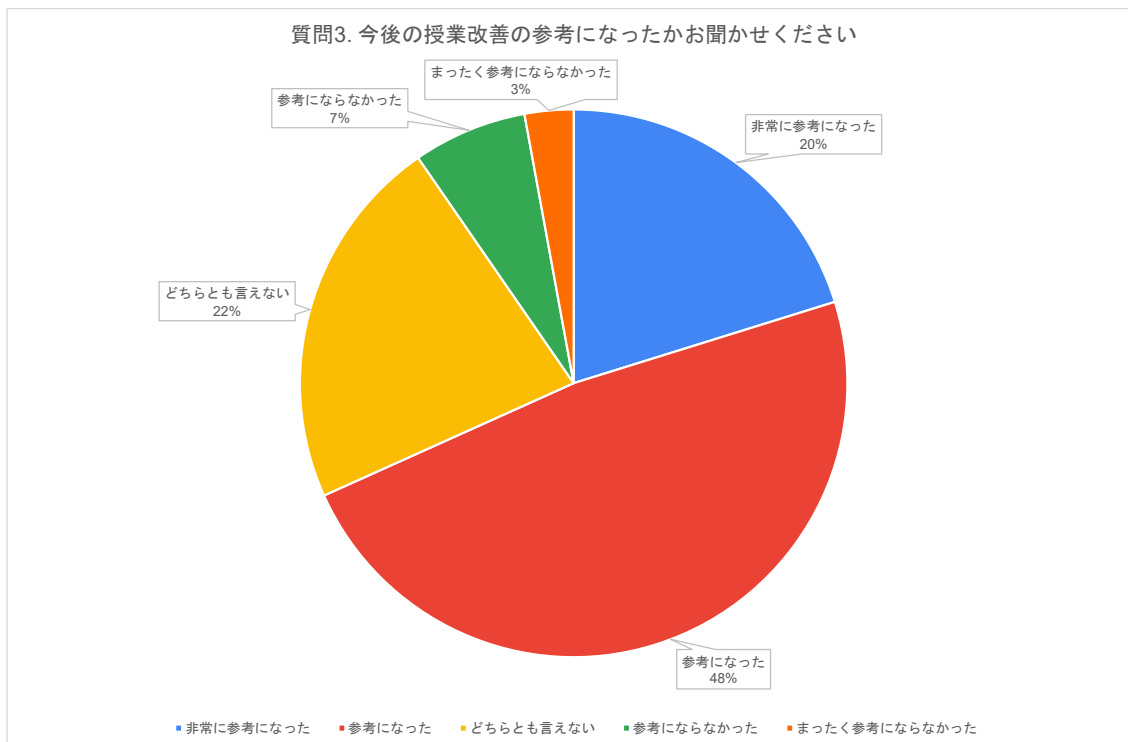
質問1. 本日の研修内容の感想をお聞かせください。



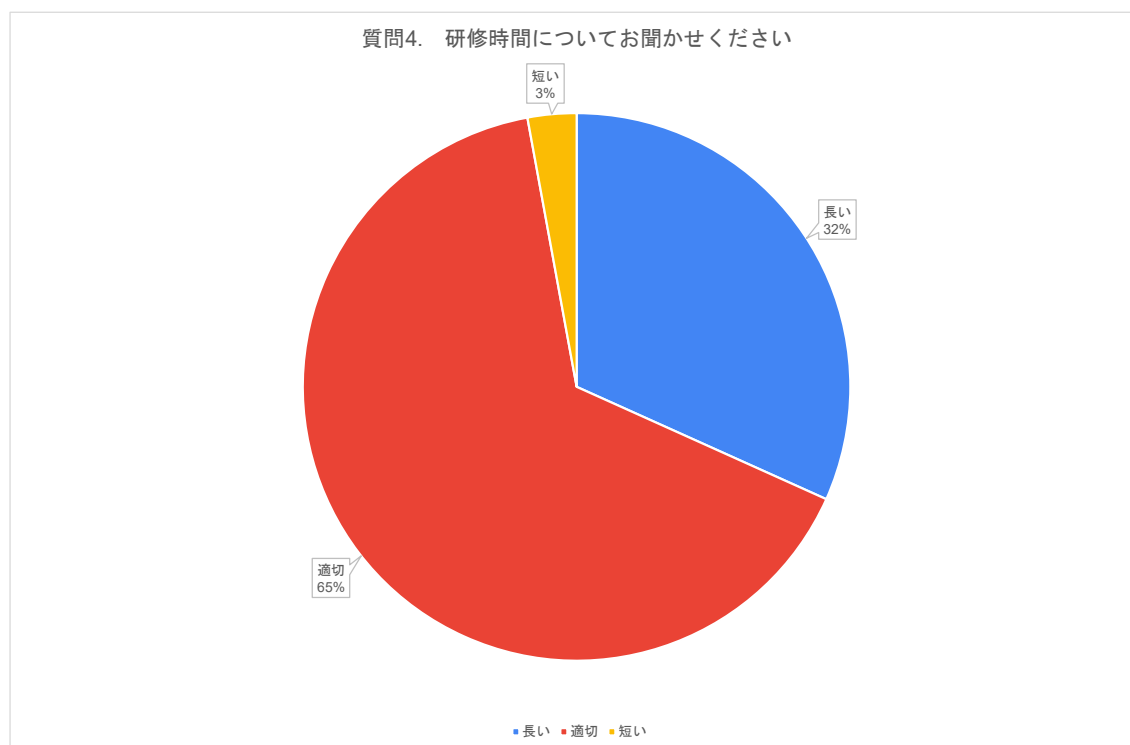
質問2. 研修内容への理解度についてお聞かせください。



質問3. 今後の授業改善の参考になったかお聞かせください。



質問4. 研修時間についてお聞かせください。



質問5. 次年度以降取り上げて欲しいテーマがあればお聞かせください。

- ・ 若年者人口減に対応する大学授業のセールスポイント。
- ・ 効果的な講義方法の最新事情など。
- ・ 大学ランキングで上位にある大学で、興味深い取り組みをしている大学の事例。
- ・ 武蔵の学生でも実施可能で、講義科目のアクティブ・ラーニングの実践例。
- ・ インストラクショナルデザインのワークショップ(対面授業とオンライン・オンデマンド授業)。
- ・ 新しい「指導補助者」の活用例。
- ・ ChatGPT の大学教育への適用と、その問題点、著作権との関連など。
- ・ 学修ポートフォリオや外部業者提供の学修効果測定の利用における運用や課題など。
- ・ 授業運営において DP の達成度をどのように位置付けるか、など。
- ・ DP の PDCA サイクルをいかに回すか。
- ・ LMS(学習管理システム)について。
- ・ アンガーマネジメントなど。

2. FD フォーラム「学生と共に考える授業改善」

司会: 林 雄亮 (FD 委員長、社会学部教授)

日時: 2023 年 10 月 12 日 (木) 17:15~18:30

場所: ZOOM によるオンライン開催

テーマ: 「学生と共に考える授業改善」～武蔵大学の教育(授業)に対する改善点について～

〈趣旨と概要〉

武蔵大学 FD フォーラムは、テーマに基づき学生が授業改善に向けた提案を行い、それを受けて学生と教職員がともに授業改善に関して検討する企画である。FD 活動の中でも、特に学生を主体とするものであり、学生アンケート等では知ることができない生の声を受けて、教職員・学生が一体となり、課題について検討することを目的としている。本年度は、高橋学長の開会挨拶後、Zoom のブレイクアウトルームを用いて、それぞれの学部と教職課程に分かれて実施された。各学部および教職課程からは合計 14 名の学生にご登壇いただいた。実施概要、学生からの提言(発表タイトル・テーマ)は以下の通りである。

1. タイムスケジュール

時間	内容
17:15 [5分]	開会挨拶 (高橋学長)
17:20 [30分]	学部毎に分かれて学生からの提言 ※1 グループ 10~15 分程度
17:50 [40分]	ディスカッション (進行: 各学部 FD 委員)
18:30	閉会(ディスカッション終了次第、学部ごとに閉会)

2. 学生からの提言

学部学科	学年	氏名	発表タイトル・テーマ
経済学部金融学科	4	高木大知	キャリアサポートとキャリア教育に関するカイゼン
経済学部金融学科	4	梁取慧	履修する学生からの提案
人文学部英語英米文化学科	3	加藤愛理	志望書によるゼミ所属と、英単語で授業の学び定着
社会学部社会学科	4	露木鉄心	社会学部の量的方法論科目に関する要望
社会学部メディア社会学科	3	小嶋裕太郎	学生間コミュニケーションと能力発展の実態と提言
国際教養学部国際教養学科 EM 専攻	2	東隆康 刈米琉英 西原梓	より質の高い授業を目指して
国際教養学部国際教養学科 GS 専攻	2	河合陽菜 松浦心音 仁木采子	学生と共に考える授業改善
教職課程	2	鈴木花織	FD フォーラム
教職課程	2	伊藤心南	つながりの課題
教職課程	2	江口陽	教職課程改善提案

今年度はそれぞれの学部、教職課程で分けたことで、例年に比べて具体的で活発な議論が展開された。昨年度を振り返ると、学部、教職課程特有の課題については他学部には当てはまらないことや伝わりにくいことも多かったため、このような方法をとったことのメリットは大きいと考えられる。なお、当日の様子は動画で記録し、後日専任教員に対して公開した。次年度の開催方法については今後検討することになるが、全学と各学部、教職課程別での実施を隔年にするなどの工夫も考えられるだろう。

(文責:林雄亮)

3. 教員 FD 研修報告

<研修の概要>

名称:「令和5年度FD推進ワークショップ——授業運営のセルフチェックとピアレビューを通じて」

日程:2023年8月8日(火)10:30~17:10【B日程】

開催方式:オンライン(Web会議システム Zoom)

主催:一般社団法人 日本私立大学連盟

報告者:松原薫(人文学部・専任講師)

<研修の目的>

新型コロナウイルス禍において、オンライン授業が定着したが、対面・オンラインなど授業の実施方法の変化によらず、授業改善の本質は変わっていない。FDの活動内容には、様々なレベルがあるが、本研修ではその中でもマイクロレベル、すなわち授業改善の支援を目的としたものである。受講者は、本研修のオリエンテーション、グループディスカッション、模擬授業、フィードバックを通じて、学生とのインタラクション、適切なフィードバックなどを自分の授業に取り込むことができるよう、研鑽を積むことが求められる。

<プログラム>

- 10:30-10:50 開会・オリエンテーション(全体説明)
- 10:50-12:00 グループディスカッション
- 12:00-13:00 休憩
- 13:00-15:45 模擬授業・グループ内ふりかえり
- 15:45-16:00 休憩
- 16:00-17:00 全体発表
- 17:00-17:10 閉会・事務連絡

<研修の概要>

冒頭のオリエンテーションに続き、午前は、受講者が5名ごとにグループに分かれた。そしてファシリテーターの司会のもと、受講者がそれぞれ、自分の授業について常々感じている問題意識を共有し、ディスカッションを行った。午後は引き続き同じグループで、一人 15分ずつの短い模擬授業を行い、それに対して 10分のフィードバックを行う、という実践的活動を進めた。その際に挙げた授業改善に向けた提案等は、全体発表の場で、グループの代表者がワークショップの受講者全員に共有し、それを踏まえて全体でディスカッションが行われた。

各受講者が課題と感じている点を、事前共有していたこともあって、模擬授業のフィードバックでは、有益な意見交換が行われた。どの受講者もパワーポイント等のスライド資料を画面共有して模擬授業を行ったが、普段の授業で、スライド資料を配付するのか、補足的に板書を行うのか、といった点は個人によって分かれるようだった。また資格取得を目指す講義、難解な数式を扱う講義など、授業ごとに様々な性質があるため、それぞれの授業の課題も多岐にわたることが確認された。さらに、昨今、授業において学生とのインタラクションを盛り込むことがしばしば求められるが、特に講義形式の授業である場合には、それをどのように行うのか効果的なのか、またそもそも学生は授業にインタラクションを求めているのか、といった点についても議論がなされた。

おそらく他のグループも同様であったと思われるが、報告者が参加したグループの受講者は皆、専門

分野、担当している授業の性質が、互いに全く異なっていた。そのため、先入観のないフラットな状態で模擬授業の学生役を引き受け、フィードバックができたのは、よいことだったと思う。一方、受講者同士の専門や抱えている課題に、重なるところが少ないために、問題の解決策を提案しづらいという部分もあった。そもそも、近年は大学院生に対しても研修が行われるなど、FD への意識が高まっていることも相まって、どの受講者の模擬授業も十分な工夫が施されており、根本的に改善を要する点はさほど挙がらなかった。むしろ、分野の近い教員同士を集めた方が、より具体的な課題を取り上げ、解決策を提示しあうことができたかもしれない。いずれにせよ、研修を通じて、普段なかなか接する機会のない、他大学、他分野の教員がどのように授業に取り組んでいるのか、垣間見られたのは貴重だったので、研修で得られた知見を、今後の授業設計に生かしていきたい。

以 上

4. 教務 FD

「オンライン授業への取り組みと生成系 AI」

新納 卓也(全学教務委員長)

2023 年度の教務 FD では、新型コロナウイルス感染症対策として始まった緊急対応的なオンライン授業について、さらに教育の質向上に焦点をあてたオンライン授業の導入について検討を行った。また、急速に各方面に拡がりはじめた「Chat GPT」などの生成系 AI に対する今後の対応にも取り組んだ。

1. 感染対策から教育の質向上に向けたオンライン授業

新型コロナウイルス感染症の感染対策のための特例措置として始まったオンライン授業について、2024 年度以降は特例措置を設けず、大学設置基準に定められている「多様なメディアを高度に利用したオンライン授業」を本学では「メディア授業」として開講することを決定した。これを踏まえ、各学部等に対して 2020 年度からの実績に基づき、2024 年度以降も継続して実施する科目、または新たにメディア授業として開講する科目の選定を依頼した。選定にあたっては、学生に対する教育効果が高いこと、さらに担当者にかかわらずメディア授業形式で継続して実施することを条件とした。全学教務委員会にて 2024 年度からのメディア授業を審議の上、承認した。承認された科目は、講義科目が中心であり学生自身のペースで反復して学修できるというオンライン授業の利点を生かした科目が比較的多くなった。

また、これまでのメディア授業の検証結果から課題が明らかとなった。特に学修成果の評価方法という点では、次に述べる生成系 AI の関連も考慮しながら、メディア授業であっても希望者に対しては定期試験を対面で実施することを認めた。その他、今後の課題として、初回オリエンテーション、途中経過の確認など対面で実施することで効果が上がる授業があることも確認された。このため、教室配当について今後の検討課題として取り組むこととした。

なお、メディア授業については大学設置基準により卒業要件に含まれる単位数の上限が 60 単位と定められているため、学生が卒業必要単位数の計算を誤らないようにメディア授業による修得単位数を学生自身が確認できるツールを導入することとした(2024 年4月稼働予定)。

加えて、2024 年度入学生より学生自身がパソコン等を用意し学ぶ BYOD (Bring Your Own Device) の実施が決定した。現在では、課題等の提出もポータルサイト等を通じた提出が増えており、授業外学習においてパソコンは不可欠となっている。一方で、学生が持参するパソコンについては各人の事情も考慮しスペックや OS の指定はしていないため、今後、学生がどのようなデバイスで、OS は何を搭載しているか調査し現状を把握することが重要である。これは、2027 年度からの新カリキュラムの授業内容や教員の授業運営にも大きな影響を与えることになると考えられる。

2. 生成系 AI に対する対応

2022 年 11 月に公開された Open AI である「Chat GPT」の登場により生成系 AI を用いた授業やレポート等に対する取り扱いについて急遽、検討を始めることとなった。その結果、授業担当者に対しては5月初旬に発信された学長メッセージを踏まえ、「本学授業における生成系 AI の扱いについて」の方針を示

した。本学では、生成系 AI の利用を認め、授業内容、指導方針、成績評価等については各授業担当者の判断により実施することとした。全学教務委員会では、引き続き検討を重ね、剽窃ソフトによるレポートチェックや試験におけるレポートの不正行為についても議論した。

新型コロナウイルス感染症の影響や教育のデジタル化に伴い、教育手法においても急速な変革が求められている。対面授業からオンライン授業への変化の中で、授業担当者は従来通りの方法では順調に進まない可能性がある。従って、授業運営や成績評価、学生への課題の出し方などにおいて一層、FD 研修等が重要になると考えられる。